

分水の酒吞童子伝説

その昔、桓武天皇の皇子が越後に下り、お供をしてきた否瀬善次俊綱が砂子塚に城を築いた。そして数代後、俊兼が子宝に恵まれなかったため、戸隠山の九頭竜権現に祈願したところ妻が身ごもり、16ヶ月後に男児が生まれ、外道丸と名付けられた。

外道丸は大きくなるにしたがい乱暴者となり、国上寺に稚児としてあずけられた。

その後、外道丸を何より心配していた母が亡くなったことを機に、ひたすら仏道の修行に励むようになった。

外道丸はまれにみる美男子だったため、近郷近隣の娘たちから恋文が山のように届いたが、それを開くことなく修行に励んでいた。

ところがある日、外道丸から返事の来ないことを悲観した娘が自分の命を絶った。そのことを知らされた外道丸が、恋文の詰まったつづらを開けると紫色の煙が立ち昇り、外道丸は気を失ってしまう。しばらくして自分の顔の異変に気付き、鏡の井戸に顔を映してみると、鬼の形相に変わっていたという。

仏道修行を捨てた外道丸は、国上山中腹の断崖穴にこもり、幾日か過ぎ、茨木童子を従え、丹波の大江山におもむき、千丈嶽にこもったと伝えられている。

